

## 廃都

街は老いていた  
救急車の音が何度も近くで消えては  
再び嘯り去っていった  
誰もこの街を本気で相手にしようとはしなくなっていた  
悪党共さえ立ち去っていった  
残ったのは不愚者達だけだった  
錆びたベンチに腰掛けて港から街を見はるかすと  
様々な生活の廃墟が胸を打つ  
ああ、それらはアンコール・ワットにも勝る宝ではなからうか  
ぎりぎりまで人格を破壊されながら  
没落の恐怖に燃え上がった恋が  
かつてはここに無数にあったのだ  
夢や欲望がもつれ合い、渦巻いたとかいった  
そんなことは全くどうでもよかったのだ  
追い詰められた人間が集まっていたという、そのことに比べれば・・・  
ここにあったのは決して躍動的な生ではなく  
むしろ青白く燃える生であったのだ  
そして、そのことこそ僕の胸を打つ  
物理的経済が支配していた最後の時代  
苦悩のかけらが道端に捨て置かれた最後の時代  
そして今、それらは残らず消滅した  
すなわち、‘都市’と共に・・・

(1991.6.24)